

蕎麦切 広重 江戸百館 (後編)

～ 偉業成して、コレラに死す ～

ほしひかる

(江戸ソバリエ協会 江戸ソバリエ認定委員長)

前編の「街道館」では、広重が関わった街道の「茶店蕎麦」と甲府の「家庭蕎麦」についてご紹介した。後編にあたる「江戸百館」では広重最後の仕事であった『江戸百』を拝借して江戸の「蕎麦屋の蕎麦」について観てみたいと思う。

IV.江戸の蕎麦屋 ～『名所江戸百景』より

広重は、1846年(広重 50歳)に大鋸町から常盤町(中央区京橋2丁目)へ移り、また1849年(53歳)に中橋狩野新道(中央区京橋1丁目)へ引っ越していた。要するに、江戸っ子らしく広重は生涯、京橋界隈に住居を置いていたわけである。

後に(1857年)なって、広重は「市中繁栄七夕祭」を描いているが、それは自宅から眺めた南伝馬町3丁目の景色だとされている。描かれている南伝馬町3丁目の四つの蔵は、現代の銀座4丁目の〇〇ビルに匹敵するくらいの名所だったらしい。

それはともかく、広重は1852年(56歳)ごろ、先の甲州行きなどを体験をもとにして『富士三十六景』を描いていた。

そして翌年の1853年(57歳)のことだった。アメリカのペリー提督率いる4隻の黒船が浦賀沖に停泊し、一部は江戸湾にまで進入して測量を始め、幕府に国書を渡して通商を迫った。

城の閣僚たちは狼狽し、江戸中が大騒ぎとなった。

そんな最中、江戸で大地震が発生した。安政年間(1850年代)には日本全国で地震が連発していたが、江戸の大地震は1855年11月11日(安政2年10月2日;59歳)午後10時に起きた。現代でいえばM7の規模だった。江戸城、神田、小石川、本郷、下谷、浅草など江戸のほとんどが大きく揺れて、30ヶ所以上で火災が発生した。延焼した面積1.5k㎡、死者数は7000人以上にのぼった。

江戸幕府にとってはまさに内憂外患の時だったが、わが国は従来から災害対応力をもっていたが、小生の考えだと、当時の日本は人口が多く、国全体に力強さがあつたから素早く復旧できたのではないかと思う。幕府や諸藩、そして何よりも江戸町会所の救済がうまく展開し、富裕層による施しも大に行われた。

そのころ広重は『六十余州名所図会』の制作中であった。幸い広重宅は焼けなかったが、すぐ目の前の南伝馬町1、2丁目は建物が倒壊し、出火。辺りを焼き尽くした。広重が若いころ過ごした定火消屋敷も消失していた。

火消の仕事に就いていた広重は火の恐ろしさをよく知っていた。火というのは、小さいうちに消すことが第一である。それを逸して勢いをもった大火になったら、もう人の力では制御できない。自然



〔広重住居跡〕



〔ワイン「ペリー提督」〕

鎮火を待つのみ、勇んで挑んでも第二次被害を生むだけであるが、被災者に「何とかしろ」と迫られ、恨まれたこともかなりあった。

この日は幸い、風が穏やかだったから鎮火は早かった。しかしその間、半鐘がけたたましく鳴り続け、江戸中が火の匂いにつつまれた。江戸っ子の広重は馴染みの江戸の街が、倒壊し、焼けるのはいたたまれなかった。

しかし、世間というものは変事が起きると、不幸にみまわれる者と潤う者が出てくる。大工たちは忙しくなった。また大地震のせいで鯨絵が飛ぶように売れた。それが束の間の珍事である場合と、震災の混沌から新しい秩序を展望する力が生み出されることもある。

地本問屋「魚栄」(魚屋栄吉;下谷新黒門町上野広小路)の栄吉は、江戸の街並みの崩壊と復興に注視していた。栄吉が出版界に入ってきたのは1842年ごろ、まだ新参者だった。しかし美人で評判の愛娘が店頭にいたこともあって、店は大人気となった。

栄吉は、これからは並の絵では通じぬだろうという考えをもっていた。栄吉は考えに考え抜いた末に新たな「名所絵」をとの思いにいたった。

浮世絵研究家の原信田実は、「江戸名所(=江戸の名所)」と「名所江戸(=江戸そのものが名所)」では発想がちがうと言っている。栄吉は、その名所を百、創ろうとした。そこには百年先をも目指す意欲があった。これまで「百枚の全国名所絵」というのは見られなかった。もちろん「江戸百」もなかった。それを栄吉はやろうというのである。三代目歌川豊国(1786~1865)と仕事をしてきた栄吉は、歌川派の広重に目を付けた。二人は会った。栄吉以上に、江戸の街並みの崩壊と復興を凝視していた江戸っ子広重は「面白れえ」と、栄吉の発想に飛びついた。

さっそく二人は江戸の範囲を、西は玉川堤(新宿御苑西口)、北は千住(千住大橋)、東は堀江・猫実(浦安)、南は千束(洗足池)とした。

奮い立った広重はすぐに「芝うらの風景」「玉川堤の花」「千住の大はし」「堀江ねこざね」「千束の池袈裟懸松」を描き上げた。

3月28日、広重は還暦を迎え、「薙髪の日」を行った。人生最後の仕事に挑もうとの強い気持があったからだ。広重は狂歌仲間の天明老人(箔屋町;本田甚五郎)や、梅素亭玄魚(浅草;宮城喜三郎)らの知恵も借りることにした。

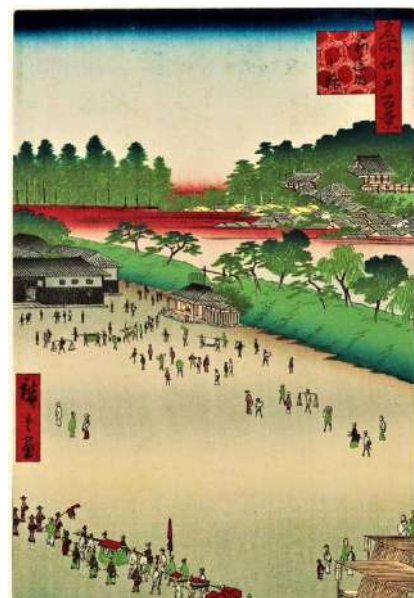
1. 「筋違内ハツ小路」 ■ 江戸蕎麦初見の常明寺

この広場は火事が多かった江戸の街に設けた「火除地」である。若いころ定火消の仕事に就いていた広重は、江戸の「火除地」を名所として描きたかったのではないだろうか。

この火除地からは八つの方向に向かう道があったので、「ハツ小路」とも呼ばれていた。絵のやや上方には神田川があって番屋がある。それを通過すると冠木門、その門をくぐれば橋である。遠くには神田明神の杜が見える。

絵の下方は現在の淡路町・須田町であり、広重のころは「団子坂藪の神田支店」があったらう。

話は変わるが、江戸の蕎麦史のなかで有名な寺がある。「江戸蕎麦初見の寺」といわれる常明寺である。徳川2代将軍秀忠の代の1614年に、江戸の常明寺という所で、京粟田口の尊勝院慈性、近江坂本の薬樹院久運、そして江戸日本橋小伝馬町の東光院(現:台東区西浅草)詮長の三人の僧が風呂屋に行



【筋違内ハツ小路】
望月義也コレクション
『広重 名所江戸百』

ってみたが満員だったので、戻って常明寺で蕎麦切を食べた、と『慈性日記』という史料に記録されている。ただ残念なことに、当の常明寺の所在地が明らかになっていないため「謎の寺」「幻の寺」と呼ばれている。

では「謎の常明寺はいったい何処にあったのか？」

私は、この絵がもう少し拡大した場合、その範囲内にあったと推定している。

広重の絵を広くしたような古地図に『豊島郡江戸庄』(1632年)というのがある。その古地図を見ると、神田川の内側つまり江戸城側には新石町、須田町、連雀町の町名が記され、その南北に寺院が集まっている。北方に「西福寺」「西念寺」「寺」「寺」「寺」が並び、南側に「寺家」「寺家」「誓願寺」「法おん寺」「し。しょう寺」「法性寺」などが並んでいる。

私は、この古地図を見ながら【常明寺神田説】がありうらと思っている。

第1の理由として、日記を書いた慈性は、新石町で借屋したり、法性寺では幾度も宿を借りたり風呂に入ったことや饅頭を食べたことを記録している。また慈性の父日野資勝は西福寺でご馳走になったことがある、という具合に日野父子にとって、この一帯は縁がある。



【寛永九年『豊島郡江戸庄』】



【現在の延壽稻荷神社】

第2の理由として、当時の神田雉子町には風呂屋があった。現在の神田小川町1丁目・神田司町2丁目・神田須田町1丁目あたりである。

だから、雉子町の風呂屋に行って戻ったという記述に整合性があると考えられる。

だから【常明寺神田説】であるが、もちろん広重の時代にはもう当地に常明寺はない。だから「幻の寺」なのである。

余談だが、地図にある誓願寺というのは、明暦の大火後に浅草へ移転し、その後は当地は土井能登守の下屋敷となった。屋敷の鎮守として祀られていた延壽稻荷神社が今もその地に建っているため、当地が昔の誓願寺跡だということが分かる。

なぜ誓願寺にこだわるかといえば、この誓願寺は浅草に移転してから蕎麦喰地蔵尊の伝説を生んだ寺として蕎麦界では有名なお寺だからである。誓願寺跡に建つ延壽稻荷神社はかんだやぶと神田まつやを見守っている。



【日本橋雪晴】
(望月義也コレクション)



【現在の日本橋河岸跡】
(ほしひかる 写真)

2.「日本橋雪晴」■ 日本橋に蕎麦屋登場

『江戸名所百』の巻頭を飾っているのがこの絵である。五街道の起点であり、舟運のよい日本橋が、江戸一の繁華街だったからこそその資

格がある。

絵は日本橋川に日本橋が架かっている。最初は川に二本の大木を渡したから「日本橋」となったと伝えられている。遠くに江戸城と白富士が見えるから、手前が日本橋瀬戸物町、川向こうが日本橋通り一丁目だろう。

当時の日本橋、とくに橋の手前の瀬戸物町(室町 1、2 丁目、本町 1、2 丁目)辺りは江戸の中心地であった。瀬戸物町の名は、当時水野家や大原家など 6 軒の瀬戸物店が在ったことによるが、その後、町飛脚問屋が興り、魚河岸も開かれた。日本橋魚河岸は「一日千両」の取引が行われていた。以来、1923 年(大正 12 年)の関東大震災後に貨物列車運搬に都合のよい築地市場に移転するまでの 300 年余、日本の魚市場の中心であり続けた。

この魚河岸が瀬戸物町の繁華街に接する位置にあるところから、1 水菓子店、鰹節・塩干肴問屋「伊勢屋」(にんべん;1772 年)、煎餅店、白玉餅店、乾物問屋、御膳海苔問屋、醤油酢問屋、諸国銘茶問屋、高級料理店、江戸前大蒲焼店、御前生蕎麦「清蕎庵」などの有力商人や有力店が集まってきた。

蕎麦の商いというのは、江戸初期に日本初の外食店である「茶飯屋」が待乳山聖天の門前にできた直後に「信濃屋」や「仁左衛門」らが、《正直蕎麦》や《けんどん蕎麦》を始めたのが最初である。《正直蕎麦》浅草で展開したいらしい。また「信濃屋」は日本橋瀬戸物町で《けんどん蕎麦》の店を開業し、日本橋の葦原(元吉原)の仁左衛門は浅草の新吉原江戸町二丁目へ進出して《けんどん蕎麦》を商い始めた。

では、これら《正直蕎麦》や《けんどん蕎麦》はどのようなものだったのだろうか、ソバリエとしては気になる。《正直蕎麦》は小椀に入った蕎麦を商っていたというが、詳細は分からない。

ただ江戸初期の『本朝食鑑』や『料理物語』から推理すれば、小椀に入った蕎麦を垂れ味噌で和えて食べていたことが考えられ、おそらく《けんどん蕎麦》もまた似たような物だったのだろう。なお、後代に「慳貪箱」が現れるが、これは出前箱であるから参考にならない。いずれにしろ江戸初期の蕎麦というのは明確ではない。

ところがである。1690 年ごろ、日本橋新材木町の東堀留川(現:日本橋堀留町と小舟町の境界)の萬橋辺りに「信濃屋」(※日本橋瀬戸物町「信濃屋」とは別)という蕎麦屋があった。

新材木町というのは、本材木町(日本橋 1 丁目)に対して、竹木・薪炭、米などが集まる元気な町であった。そのうえ「江戸の七稲荷社」といわれた梶森稲荷神社(現:中央区日本橋堀留町)の参拝客で賑わう町でもあった。威勢のいい町人たちは、勢いで小椀や皿に盛られていた冷たい蕎麦につゆをブツ掛けて喉に流し込むように食いはじめたところから《ぶっかけ蕎麦》が始まったという。



【小椀に盛った蕎麦】



【かけ蕎麦】



【しっぽく蕎麦】

しかし、汁を「ブツ掛けて、食べるには、「和えて、食べた時代の汁とちがって、現在のように付け汁がきちんと別になければならないということになる。

ところが、寛延年間(1748~51)に日本橋瀬戸物町の近江屋や日本橋人形町の万屋などが《しっぽく蕎麦》を商っていたという。《しっぽく蕎麦》というのは《掛け蕎麦》にたくさんの具が入っているものである。したがって、《ぶっかけ蕎麦》から60年後には《かけ蕎麦》が完成していたことになる。

マ、とにかく、こうした日本橋は蕎麦を商う蕎麦屋が活況を呈していたことは明白である。

この稿では蕎麦屋を例に出したが、広重が日本橋を巻頭にしたのは、こうした江戸の商いの地が日本橋であったからだろう。

3.「深川洲崎十萬坪」■ 洲崎の《ざる蕎麦》

江戸っ子たちはこの絵を見て驚いただろう。海上の空を飛ぶ大鷲の鋭い目から見た下界の江戸湾の出洲を描いているのだから。遠くには筑波山が浮かんでいる。広重自身が上空はから本当に見たように描いているが、その想像力はすごいものである。

この地は現在の江東区石島、千田、千石に当たり、近くには弁天の社(現:洲崎神社)がある。1723年から3年がかりで埋め立てられ、「十萬坪」と呼ばれた。この広い干拓地が名所「江戸」の一つとして選ばれたのだろう。

昔、この地のどこかに「伊勢屋」という蕎麦屋があったが、そこが《ざる蕎麦》を始めたという。

先述したように蕎麦屋が登場したのは江戸初期である。

ただしそのころの蕎麦がどのようなものだったかは明確ではない。おそらく小椀に蕎麦を入れ、垂れ味噌で和えて食べていたのだろうと推量するしかない。なぜ分からないかという、今のつゆの材料である、鰹出汁、砂糖・味醂、醤油が十分に流通していなかったからである。それが一般町人の口に入るようになったのは江戸中期からである。

つまり江戸中期になって、現在私たちが食べている蕎麦がほぼ完成したというわけである。そしてこのころから日本人は、「和えて、食べることから、美味しい蕎麦汁に「付けて、食べるという形に変化した。そこへ洲崎の「伊勢屋」がもう一つ革新を加えた。それまでは蕎麦は「大笹」に盛って、みんなで囲んでそれを摘まみ、汁に付けて食べていたが、「伊勢屋」はお一人様用の「小笹」を開発した。これが受けて《ざる蕎麦》は日本の蕎麦屋の代表的商品となったのである。それは1791年ごろのことだったというが、この時代の洲崎は干拓したばかりである。

話は個人的なことになるが、私の先祖も江戸初期に島原(長崎)から同じ有明海沿岸の



〔深川洲崎十萬坪〕
(望月義也コレクション)



〔現在の洲崎神社〕
(ほしひかる 写真)



〔ざる蕎麦〕
(ほしひかる 絵)

佐賀・川副にやって来た。干拓事業に乗り出すためである。成功すれば土地は自分の物同様となり、堤防は自分の名前と呼ばれるようになる(例:徳右衛門搦、喜兵衛搦など)。やがては庄屋に推されたりすることもある。しかし失敗すれば破産したり、一家が大波に流され行方不明になったりして悲惨である。そして次にやって来る集団もまた同じことをやっていく。こうして干拓地は段々と広がっていく。洲崎もそうやって開拓されていったのだろうが、そんななか、ある台風の日「伊勢屋」は店ごと大波にさらわれたという。

しかし「伊勢屋」は流失しても、《ざる蕎麦》は今も生きていることは承知のとおりである。

4. 「馬喰町初音の馬場」 ■ 馬喰町の《鴨南蛮》



【馬喰町初音の馬場】
(望月義也コレクション)



【現在の鞍掛橋交差点】
(ほしひかる 写真)

絵は、馬喰町一丁目の西北に初音森社(現在は移転)があった所の馬場である。ここで大坂冬の陣(1614年)の馬揃えが行われた。だから「馬場」と呼ばれた。先述の常明寺で三人の僧が蕎麦切を食べた年である。ちなみに大坂夏の陣(1615年)の馬揃えが行われたのが高田馬場である。

この馬場は大坂の陣に勝利した徳川政権にとっては記念すべき名所だということだろう。また元火消の広重は火の見櫓も描いた。

この初音の馬場から馬喰町一丁目に行くと、竜閑川の鞍掛橋辺り(現:鞍掛橋交差点)に高級蕎麦店「笹屋」があった。その店主治兵衛は《掛け蕎麦》に鴨肉3切と叩き骨2個と葱を入れてみようと思いついた。それも日本橋ならでは



【現在の元祖鴨南蛮】
(ほしひかる 写真)



のことだろう。というのも、日本橋瀬戸物町や安針町(室町1丁目、本町1丁目)辺りには鳥肉問屋があった。鳥問屋の最初は「東国屋」だという店だったが、ただし当時の日本人の食肉習慣は雉か、鴨、鴈、鴨などの水鳥だった。だから店先にはいつも鴨が3羽ずつ首を束ねてぶら下がっていたという。これを見た治兵衛が後に蕎麦屋の逸品といわれる《鴨南蛮》を開発した。1824年ごろのことだと伝えられている。

ちなみに、「笹屋」の掛行燈は(1807~91)の父市五郎の作だと

漆工家・絵師の柴田是真

というくらい有名店だった。また、「笹屋」の《鴨南蛮》は、後(1848年)に同じ馬喰町の伊勢屋藤七が引継ぎ《鴨南蛮》とやさしい字になった。以後、→ 川辺藤吉 → 杉山喜代太郎 → 桑原光二 → 桑原敏雄 → 桑原芳晴氏 → 小林敦広氏に継がれ、今も藤沢市湘南台で「元祖 鴨南蛮」として健在である。

5.「千駄木団子坂花屋敷」 ▣ 団子坂の藪蕎麦

江戸時代、現在の文京区から豊島区にかけては植木農家が多く、1800年代の初めごろには染井で



↑上【団子坂 藪蕎麦】
(かんだやぶそば絵葉書)

←左【千駄木団子坂花屋敷】
(望月義也コレクション)

菊細工が始まったが、その後下火になっていた。1854年になる今度は団子坂の植木屋が活発になり、植梅・植惣・植重・種半の四大園はじめ20軒以上の店が坂の両脇や周辺に軒を連ね、題材や仕掛けを競い合った。また商才に長けた植木職人は、植木栽培のほかに庭園を見ながら飲食可能な茶店まで始めた。1852年には植木屋宇平次が「千駄木花屋敷」を開いた。そこには茶亭

「紫泉亭」があり、崖の上には辺りを見下ろせる眺望蒸し風呂もあって、花見の季節には観光客がどっと押し寄せた。そんなわけで団子坂といえば、菊と桜の名所となった。それゆえに「名所絵」を得意とする広重は「花屋敷」とその境内に建つ三階建ての茶亭「紫泉亭」を選んで描いたのであろう。この茶亭は安政の江戸大地震で崩れ落ちたが、絵に描いてある三階の家方は無事だったらしい。

ところで、団子坂の藪下通りには三代目三輪伝次郎が営む蕎麦屋の「蔦屋」(俗称「藪蕎麦」)があった。ソバリエとしてはむしろそちらの方が気になる。

1833年の漢学者松崎慊堂の日記には「団子坂の蔦屋に入り、蕎麦条を食ふ」とあるところから、団子坂の藪は古くからあったようだ。

俗称でも、「藪蕎麦」と呼ばれていた蕎麦屋の最初は、1800年初めごろに雑司ヶ谷鬼子母神から東方の藪のなか、今の南池袋4丁目の御獄山清龍院辺りにあった蕎麦屋「爺がそば」だといわれている。だが、そのあとの「藪蕎麦」といえば、団子坂藪下通りの蔦屋が有名であった。ここも庭には滝が落ちて風呂もあるという豪勢な蕎麦屋だといわれている。

この蔦屋の神田連雀町支店を浅草蔵前の蕎麦屋「中砂」の4代目堀田七兵衛が譲り受け「神田藪蕎麦」を始めた(1880年)。

2019年に開催された「かんだやぶそば創業140周年」に参加したときに頂いた団子坂の「蔦屋」の絵は、画家の木下栄三氏が史料をもとにして広大な蕎麦屋として描かれていて、参考になる。



【「かんだやぶそば創業140周年」にて】
～更科堀井、蓮玉庵、かんだやぶ、室町砂場の
旦那衆

6.「虎の門外あふひ坂」 ■ 葵坂の屋台蕎麦



【虎の門外あふひ坂】
(ほしひかる 蔵)

【現在の虎の門葵坂】
(ほしひかる 写真)

景色絵が得意だった広重の絵には人間はあまり登場しない。描いてあっても人間も景色のひとつであるかのように小粒にしか描いてない。ところが珍しく「虎の門外あふひ坂」では表情のある人間が登場している。よってこの項だけは小説風に観てみたくなった。

12月10日の夕暮だった。広重は溜池から葵坂まで歩いてきた。陽が落ちて辺りは薄暗くなった。坂の右側は肥前佐賀藩鍋島三十五万石の屋敷、左には日向延岡藩内藤十萬石の屋敷だった。坂を下ると、正面は讃岐丸亀藩京極五万石の屋敷である。広重は版元からよく言われた。

「江戸は大名屋敷と寺の街です。それを描くだけで『江戸』になる」と。「成る程」とも思う。しかし、元下級武士の広重は、あまり大名屋敷を描くつもりはなかった。一般人が好む名所景色絵が好きだった。だかにとってただ名所景色絵を描けばいいというわけでもない。だから絵師広重は名所景色のなかの何かを求めて歩き回るのであった。広重にとっては歩くのも仕事であった。

辺りはまた暗くなってきた。人影もまばらになり、女性の姿が見なくなった。遠くで犬が吠えている。お濠のそばには二軒の屋台が並んでいた。江戸の街中には川や堀や池の近くには屋台がいる。広重はブルッと肩を震わせた。「さすがに寒いな」と思ったところにつゆの匂いが漂ってきた。広重は足を向けた。さらに近づくと濠の水の匂いもする。屋台の一軒は、水でも汲みに行っているのか誰もいない。広重はもう一軒の屋台に近寄るや、「《かけ》をくれ」と親父に声をかけた。

蕎麦を待っているあいだ後を振り返り、あらためて辺りの景色を眺めてみた。

空の月は冴え、星が煌めいていた。前まではあの坂上に榎木が立っていたはずだが、大地震で倒れてしまったらしく今は姿がなかった。溜池の水の落し口からは水が音を立てて落ちていた。広重は夜景を描くのも得意であったが、屋台蕎麦は江戸の街の夜景にふさわしいと直感的に思った。

広重は落とし口から落ちる水を見詰めた。というよりか若いころ火消同心だっただけに感心することがあった。それは江戸城の濠の巧みさであった。

江戸城のお濠の水源は三つあった。

一つは江戸の高台に降る雨である。その雨が集まる低い谷筋と川筋、つまり局沢と平川を掘り下げて、お城のぐるりを囲んだのが江戸城のお濠であった。その濠の分水嶺になっているのが半蔵門で、一方が「局沢の沢筋」。これは桜田濠、日比谷濠と連なり、さらに数寄屋橋、八丁堀などへ流れて海へ行くのである。反対側が「平川筋」。この水は平川濠、千鳥ヶ淵、清水濠へと移動していた。

水源の二つめは自然の湧水であった。広大な江戸城内には鬱蒼とした森林があり、湧水や、池があった。城内の濠のなかで最も上流にある道灌濠の水は蓮池濠へ、乾濠へと移っていくのであった。

そして三つめの水源が人工の玉川上水であった。玉川の水は四谷大木戸から桶管によって、一部は四谷御門 → 半蔵御門まで運ばれて城内へ、もう一つは桜田濠に補給されているのであった。

知り合いの唐人が「江戸は世界一の水の都だ」と言っていたが、その原点は江戸城の濠にあると思っていた。その唐人は、オランダ舶来の染料である「ベロ藍」を扱っている商人だった。「ベロ藍」は

今までの日本の藍色とは違っていた。英泉、北斎ら意欲的な絵師たちはこの新しい色に飛びついた。むろん広重も使った。広重得意の海、川、堀、池の水を描くためにであった。

広重が水辺の景色にこだわるのは、火消同心の子として生まれた彼にとって、社会生活には水が不可欠であることを生まれる前から認識していたせいであるかもしれなかった。広重の水観は、「人間から見れば水とは生活であるが、絵師から観れば水とは景観である」とまで思っていた。したがって江戸の名所とは、水辺を描くことであると考えていた。そして広重の水はひとしくベロ藍で処し、さらにぼかしを使っていた。このベロ藍とぼかしが「広重」であったのである。

そんなことを思っているとき、屋台の親父が広重に《かけ》を手渡した。「へい、お待ちド」「おっ」と声にもならない声を出しながら蕎麦を受け取り、汁を啜った。蕎麦そのものは期待していないが、冬の夜は汁の温かさが旨い。それもまた夜景の味だと思った。

そこへ、晒木綿の後鉢巻に腹巻と禪姿の、素足の若者が二人、京極屋敷の金毘羅宮の幟の方へ駆足で通り過ぎて行った。1人は20歳ぐらいの若者、1人はちょっと見たところまだ14、5歳ぐらいだった。

「直ぐそこの、金毘羅さまへの寒三十日裸参りでごぜえますよ。そう言やあ、あの地震で倒れた京極様の練堀も立派にご修理なされたそうで…」と親父が言った。

寒の参りとは、立春に至る30日の間に、江戸職人の子弟が自分仕事の腕が上達するようにと神仏へ祈誓することであった。いつごろから始まったか知らないが、20歳前後の若者が多く、たいていは二人三人と連れ立って詣でるようだ。彼らは家を出るときに水垢離をして、手に「日参」と書いてある長提灯を持って、鈴を打ち鳴らしながら、駆足で日ごろ信じている神仏が在す寺社に至る。江戸では、ここ金比羅社や、お城の向こうの山王神社、あるいは神田明神や、根津社、上野東照宮、浅草の三社、深川の不動尊などに詣でることになっている。目的の寺社に着いたら、再び水を浴びて祈願し、また駆足で戻るのである。

裸の若者の背中を見送りながら屋台の親父が感嘆して言った。「江戸っ子だねエ」。

その言葉に広重はハツとして、箸を止めた。広重も江戸っ子である。だからこそ、版元の魚屋栄吉のすすめで、「名所江戸」を絵にして残そうと思い立ったのである。

「ならば、寒の裸参りを描かなきゃ話にならぬ」と広重は思った。先には「王子装束えの木大晦日の狐火」を描いたばかりであった。そこでは群れる狐の動きの、ある瞬間を切り取ったように描いて、「狐火」という「靈氣」を導き出すことに成功した。今度の、この「葵坂の寒の裸参り」では、冬の夜の「冷気」を切り取って描いてみよう、と広重は自分に言い聞かせた。



〔王子神社の絵馬
「王子装束えの木大晦日の狐火」
(ほしひかる 蔵)〕

7.「日本橋通一丁目略図」 ■ 日本橋の御膳生蕎麦「東橋庵」

日本橋白木屋の前の道路で長柄の傘をさした住吉踊りの連中が踊っている。ここ日本橋の賑わいは、16世紀末に白魚市が開かれたことに始まる。その白魚市は橋の北側の魚河岸へと発展し、川沿いには塩、米などの食材から、材木にいたるまで商いが広がり、食問屋、高級料亭が並ぶようになった。あの有名な高級料亭「百川」も日本橋浮世小路にあった。

人と物と金が集まれば、さらに大店が進出する。「白木屋」は1665年に日本橋通1丁

目で呉服屋を開店した。そして 1683 年には「越後屋」が現金売りという新手の商いを始めた。その白木屋は大地震で裏の土蔵が壊れたというが、すぐに建て直された。

この白木屋の隣が御膳生蕎麦「東橋庵」である。「東橋庵」は江戸後期の史料には必ず掲載されている高級蕎麦店であった。江戸っ子の広重は夜の江戸にふさわしい「屋台蕎麦」を描く一方で、江戸の中心は日本橋には「高級蕎麦店」を描かなければとの思いをもっていた。だから江戸の通りの名物住吉踊りと白木屋と高級蕎麦屋を描いたのである。



【日本橋通り一丁目略図】
(ほしひかる 蔵)



【現在の日本橋西川・コレド日本橋】



【日本橋フェア・トークショウ】

8.歌川広重「死絵」 ■ コレラに死す

1858年(安政5年)、江戸の人々はコレラ禍に怯えていた。

コレラはもともとインドガンジス河流域の風土病であった。そのインドを支配したイギリスがグローバル貿易を展開する度にコレラも世界に広がっていった。日本列島には第1波(1822年)・第2波(1858年)・第3波(1862年)の三度の襲来があった。いずれも長崎に上陸して上方へ、その後は東海道・中山道を東漸した。伝染病は人間が運ぶ病である。だいたい商いによって運ばれる。仕事ゆえに大人数で、遠くへと。具体的には船便(海・川)によって港湊へ運ばれ、彼らが上陸したあとは人々とともに街道の宿場町から繁華街へと移動する。また大人数が移動する参勤交代も運び屋となる。たとえば1821年の参勤交代は265家中153家が東海道を往還した。コレラ菌にとってはまことに都合のよい媒体だった。こうした病原菌の移動は、現代でいえば成田・羽田・関空などの国際空港から侵入して、国内便や新幹線で全国へ運ばれ、蔓延していくみtainなものである。こうして、第2波は上方、東海道筋を東漸して7月に江戸に至り、8月に大流行した。結果、100万都市といわれた江戸において約28万人の命が失われた。当時の人たちは突然死に襲われるこの病を「コロリ」と呼んでいたが、緒方洪庵など海外の医学を勉強している医師たちは、正確に「コレラ」であることを知っていた。だから医師のなかには伝染病に対する幕府の認識および水際対策のあまさを指摘する者もいたが、医学に素人の幕府の幹部は降ってわいた災難としか判断しなかった。こうした幕府の無策によっておびただしい犠牲者が出たのだが、残念なことにそのなかに広重がいた。

罹患した広重は、激しい下痢と嘔吐を繰り返し、脱水症状に陥った。しかし、大地震のおかげでこよなく愛した「江戸」を描くという大願を成就した広重は、コロリにやられても思い残すことはないと思悟していた。腹が決まった広重は「西方浄土の名所巡りにでも出かけようか」としゃれた辞世を詠んだ。

「東路へ 筆をのこして 旅のそら 西のみ国の 名ところ見舞」

涙ながらに広重の死絵を描いたのは長年の友であり好敵手であった三代目豊国だった。その絵姿は、穏やかながらもきりっとした表情の、風格のある立派な絵師であった。その死絵を観ながら、盟友天明老人が広重の略歴をしたためた。こうして天才絵師歌川広重は浄土の名所巡りへと旅立っていった。1858年(安政5年9月6日;62歳)のことだった。

[完]

《参考》

- ・望月義也コレクション『広重・英泉 木曾街道六拾九次』
- ・望月義也コレクション『広重 名所江戸百』
- ・原信田実・原田糸子「地震の痕跡と『名所江戸百』の新しい読み方」
- ・野村裕江「江戸時代後期における京・江戸間のコレラ病の伝播」
- ・菊地万雄「江戸時代におけるコレラ病の流行 - 寺院過去帳による実証」